医療コラム「未病の憂い」スペシャル

未来を見据える〝トップ探訪〟

水道橋の地から歯科医療への高い貢献を（金子）〝家庭医〟としての歯科医の新たな役割見出す（亀井）

金子 譲 東京歯科大学 理事長 × 亀井英志 長栄歯科クリニック 院長

創立は明治時代。１２３年の歴史を持ち、現存する最古の歯科系大学として知られる東京歯科大学。本誌で好評連載中の医療コラム『未病の憂い』の筆者・亀井英志医師も、同校のＯＢだ。

本稿では、亀井医師による〝特別対談〟として、東京歯科大学の金子　譲理事長をお迎えし、歯科医療の現状、そして未来について対談をいただいた。

――２０１３年は、東京歯科大学の歴史にとって、新たな一ページが刻まれた年でしたね。

亀井　創立１２０周年事業の柱のひとつであった「水道橋校舎新館」が竣工しましたね。私の学生時代、周囲の多くの学生も大学に行くというのを〝水道橋行ってくる〟と言っていたものです。改めて金子理事長に伺いたいのは、東京・水道橋のメインキャンパス化、その意義をどうお考えでしょうか？

金子　本学創立１２０周年を機に、東京・水道橋へのメインキャンパス移転を進め、２０１３年夏、水道橋校舎新館が竣工しました。臨床実習などを含めて、本学の学生は学部生活の六年間を、ＪＲ水道橋駅周辺のキャンパスで送る体制が整ったわけです。東京・水道橋のメインキャンパス化、その価値を高め、社会に還元していくのは、これからが本番です。都心へのキャンパス集積によって、教育・研究・臨床という歯科大学の機能充実、その強化は、これまで以上に効率的かつスピーディに進むでしょう。歯科医療の情報、ノウハウなど無形の価値を本学は、先人から引き継いでおり、本学はこれまで以上に、水道橋キャンパスを拠点に、わが国の歯科医療への貢献を高め、歯科医療をリードしていく使命をさ

▼校旗を挟んで金子理事長（左）と亀井医師（右）

らに追及していきたいと考えています。

亀井　創立１２０周年のスローガン〝継承と発展〟ですね。歯科大学として教育・研究・臨床の機能充実・強化を図り、その成果として社会から期待されているものの一つに〝新たな役割を担える歯科医の輩出〟というものがあると思います。歯科医療をリードしていく人材の育成、輩出は、本学が創立以来実現してきたことでもあるわけですが、歯科医療の現状、そして未来に対し、より多様なニーズに応じていく必要を臨床医として強く感じています。

金子　現代人で、生まれてから、人生を全うするまでの間、他の診療科にかからない方はいるかもしれませんが、歯科を受診しないという方はおられないのではないでしょうか?それだけ、歯科は社会の皆さんにとって、一番身近な〝医療機関〟であるわけですね。これは亀井先生もご認識いただいていると思いますが、本学では、創立当初から、〝歯も体の一部である〟として、歯科医は歯科だけでなく総合的な医療知識、ノウハウの習熟が必須であると教育されてきました。亀井先生が歯科身体総合医療という言葉を掲げて診療に当たられているのもその表れだと思います。昨今は、生活習慣病などの疾病と、歯科領域の疾患とのかかわりについて、一般にもだいぶ認知されるようになってはいますが、こうした情報発信、その診察をしっかりと行っていく、その役割は、やはり亀井先生のような臨床医の皆さんの大事な役割だと思います。歯科領域の専門医として、歯科医に期待される役割は、高齢者の増加など、今後多様化していくと思います。ただ、その根底には、専門医であると同時に、社会の皆さんにとって一番身近なお医者さんとしての期待を持たれていることをこれまで以上に歯科医一人ひとりが認識を新たにする必要があるように思うのです。

亀井　おっしゃる通りですね。昔から日本では歯科医は家庭医として機能しています。私のクリニックにも、予防検診ということで、定期的に来院いただける患者さんが少なくありません。しかも当院へかなり遠方からお運びいただく皆さんも多い。受診のきっかけは様々ですが、歯のケアが、結局は健康維持、増進に資することを身を以て経験されている方も多く見受けられます。そうした中で、歯には深刻な問題はないけれども、ある疾患の存在を示すいわば〝病気のサイン〟を当院が見つけ、早い段階での治療につながったというケースも少なくありません。口腔領域に多様な全身疾患の前兆が現れるということを、よく経験します。

金子　亀井先生の診療姿勢は、従来の歯科医のそれを〝改良〟しただけでは、なかなかそこまでの結果を出せないと思います。今後の歯科医療に求められているものも、従来のものを改良するだけでは、早晩、患者さんのニーズに十分応えていけなくなる。従来からあるものに、とって代わるようなドラスティックな変化を、歯科医療に携わる我々プロが、先んじて社会に提供していく、そのスピードが今後一層早まるでしょう。

遺伝子、再生医療、デジタルテクノロジーなどがグローバルな形で臨床適用されて行くでしょう。そうした変化、新風を常に歯科医療の現場に注いでいける人材を一人でも多く社会に送り出すのが、本学の使命であり、都心キャンパス化の価値をさらにた高めることにもつながると思っています。